

追悼

先生ってこんな人だった

― 恒川武敏先生をしのんで ―

山 口 信 治

この一年間にボクは二つの大きな星をなくしてしまった。もっとも星といっても天空に懸かる星々のそれではない。むしろボクの心に不継の光りと熱を投げかけてくれた星々だった。これをボクはT・T星と呼んでいる。

一つは東の天空に、そしてもう一つは西に輝いていた。この西のT・T星こそ、ツネカワ・タケトシ星であった。T・T星と呼んだのもその頭文字からとったものである。

星には自ら光りを放つものとうでないものがある。いふなれば武敏ぼしのそれは後者のそのように思う。その輝きは偉大なブツダの光りを反射してひかり続けたと言えよう。何故かその熱と光にはそこはかとボクたちに伝わってくるものがあつた。

さて、武敏先生との出会いは、ボクがこの大学にお世話になってからのことだ。しかもその間実に遠い存在でしかなか

った。そんな偏よりを打ち破ってお互いに近づくことが出来たのは、ここ数年来の学会（佛教大学々会）の仕事をご一緒にさせて頂くようになってからのことだろう。度々、うで（肘）の三・四倍という卑近距離で顔をつきあわせ、時には先生の昼めしの牛乳とパンをちゃっかり横取りしてしまつて大いに論じ合つた。以来、良きにつけ悪しきにつけボクは先生の近くでその人となりを見せてもらった。いつしか、何故か東の空に輝いていたもう一つのT・T星に似ているようにおもえてならなかつた。彼らは他人にはやさしかつた。それでいて己れには大層厳しかつたように思う。とくに著しい特徴は、人間性を疎外するものに対してもつはげしいプロテストの精神である。まさに大正デモクラシー期の社会事業家たちのもつ生粋さを残していた。

今、その先生のお人柄をしのんで何かを綴らねばならない

とすると、いつも弱いもののそば近くにおられた方だったようにボクは思う。側に立ち彼らを支え、必要とあれば丸が加えすことも拒ばなかった。そればかりか慰めを求める者にはそのやさしい言葉を決して忘れはしなかった。ボクのように弱い者の身であればこそ、そのやさしさは骨身に染みてうれしかった。

かつて、単身外国で生活していたことがあるが、誰だってそんな時ホームシックっていうやつにかかるものである。そんなだらし無いボクに慰めと励ましの言葉を送りつづけてくれたのは、武敏先生であつた。しかも便箋三枚裏表に綴ってくれた手紙は大学の様子が手にとるように分つた。ボクは一人ぼっちにされてない！と、何度も何度も、読み返して涙したものだつた。

四月二十二日、会議中、議長席にいたボクに武敏先生に何か起つたことが伝えられ研究所に飛び込んだ。すでに大の字になつて床に倒れておられた。午後からの授業に髭をそり落しそつと手でお顔をなでられた瞬間だろうか。突然、心臓の痛みに襲われその場に倒れたのであろう。胸を開いて耳を当てて心音を聞いた。蘇生を行ないながら救急隊に引き継いだ。それから間もなく病院で息を引きとってしまったのである。

数週間まえ、ボクたちは鳥羽のある小島に一泊の研修に出掛けていた。肩の荷を下ろされたのか、若いもんにかこまれてお好きな酒を多少嗜んでおられ顔を赤らめておられた。め

つたに人まえてうたつたことのない先生がマイク片手に歌いはじめた。ボクたちも先生と肩を組んでうたつた。誰れがこれが最後だと知り得ただろうか。まことに無情なものだ。翌朝、早く風呂場で先生と顔を合わせた。シャボンをつけてごしごし背中を流した。つい、はすみで先生の大事な一物に触れてしまった。だがさほど気にも止めず、むしろ上気嫌にしておられ一緒に湯につかりながら窓にさす真赤な朝日を見つていた。突然スクツと湯から身をおこし、「山口くん」と声をかけ、言葉少なげに何かを口から出して喋つた。すっかり忘れてしまつていたが、胸に耳を当てて心音を聞いたとき再びその声をきいたような思いがしてきた。

あれも、これも仕事を残して先生はいつてしまった。何故そんなに早く死に急がねばならなかったのだらう。せめて、先生からもつと側にいてほしい人々が多勢いたのに。葬儀の日、物かげや人かげに身をかくして先生の亡骸を涙を流して送った人々がいた。禅定、これこそ先生がボクに残してくれた最後の意味あることばとなつた。今、先生は応身して愛する者たちに親しく語っておられることばがあるであらう。ボクもその先生の歩いた道程をこのことばを信じて歩いてゆきたい。きつとまた先生に会えるかも知れないから。

合 掌

(やまぐち しんじ 社会学部助教授)